

三島由紀夫「金閣寺」の位置

—— 結語「生きよう」をめぐる ——

田 中 洋 之

はじめに

三島由紀夫の『金閣寺』（新潮）昭和三十一年（一九五七）は、次の一文で締め括られている。

一ト仕事終へて一服してゐる人がよくさう思うやうに、生きようと私は思った。
(第十章)

田中美代子は構造論の視点から、この最後の「生きよう」という文言に着目し、構造の要は末尾の結語であるとした上で、本作について次のように述べている。

この言葉を最後に語り手は沈黙する。ところが、すでに「行為者」としての使命を終った「私」が、これから「生きよう」とは、一体何のためにか？　いうまでもなくそれは行為の意味を語るためにほかならず、彼は「語り手」として再生し、ふたたび冒頭にもどって、この物語が語られはじめる筈なのである。つまり一回限りの「行為」は「語る」ことに

よって、幾度でも繰り返し、甦えることができる、という循環的な構造をもつにいたるのである。⁽¹⁾

さらには、この田中の見解に対して、有元伸子が次のように言及している。

『金閣寺』の最終章は、金閣に火をつけた主人公が、究竟頂で死のうとして戸をたたくのだが、扉が開かず、「拒まれた」と知覚して山に駆け上がり、「生きようと私は思った」と言うところで終わる。田中氏の述べるとおり、既に行為を果たした主人公が、これから「生きよう」とするのは、当然、作品の冒頭に再び戻って、この物語を語り始めることだといつてよく、これは卓越した指摘である。⁽²⁾

確かに田中の指摘は、有本が評価しているように、物語の構造論としては卓越したものであろう。元来、「今日まで、詩はおろか、手記のようなものさへ書いたことがない」、「ものごとを理解させやうとする、表現の衝動に見舞はれなかつた」と述べていた溝口の〈書き手〉としての再生の物語と意味付けられるからである。

だが、そのような構造論とは別に、作中の溝口の心情に即した「生きよう」という文言のもつ意味を捉え直すことも、本作を読み解く上で重要な考察となり得るのではないか。

何故ならば、この「生きよう」という言葉は、社会的には糾弾されざるを得ない行為であったにせよ、孤独の中から常に思考し続け、最後に国宝放火という罪を犯した人間の口から発せられたものであり、また、そうした自己を対象化した「語りの現在」における最も新しい時間に記された文言となるからである。

竹原崇雄は、溝口の心境に即した「生きよう」の意味を、次のように考察している。

これまでの「暗黒の世界」から離脱し、新しい世界の入り口に立って、生命の意欲を感じながら、自然な形で「生きよう」と私は思つたのである。この意欲は、ことさらに構えて意識したところに生じたものではない。自然に、ごく自然に、「一ト仕事終へて一服してゐる人がよくさう思うやうに、生きよう」と思うのである。

金閣が「私」に課した「仕事」は金閣の観念の美の創造であった。今、「私」は、その依頼主の前でその「仕事」を完成させた。その時、それは、例えば、大工の棟梁が、棟上げを終えた後、または完成した家を前に、満足の煙草を「一服してゐる」時思うやうに、新たな人生へ向けて「生きよう」と思つたのである。

竹原が言及しているように、金閣の放火を遂行した後に溝口が

覚える「一ト仕事終へて一服してゐる人がよくさうやうに、生きよう」と私は思つた」という感慨は、自ら（行為）を成し遂げたことに対する素直な満足と、その後を訪れるであろう（新たな生）への第一歩を意味するものと考えられる。

しかしここでもうひとつ忘れてはならないのは、作中の最後の文言として溝口に「生きよう」と語らせた作者・三島の意図である。

西本匡克も指摘している¹⁾ように、実際の「金閣寺放火事件」（昭和二十五年七月二日未明）の六年後に本作を執筆していることから、ニュース性自体はすでに古びているという点や、あるいはまた、物語の最終的顛末は読者が読む前から知っている、といったことから、小説を執筆する時期としては明らかに不利な状況下で書かれている。

そうした本作において、敢えて溝口に語らせた「生きよう」という文言に込められた、三島の意図、あるいはそこから導き出せる文学観といったものは、どのようなものであるのか。

中野裕子は、この「生きよう」という文言を二つの意味から捉えて次のように述べている。

放火後の溝口について最後の問題は、次の一文にかかっているだろう。それは、溝口が何故、放火の後に及んで生きようと思つたのか、という問題である。（中略）行為によつて溝口のこの生を見る場合、二つの見方が可能だろう。一つは、行為自体の意味に重点を置き、その結果として「生」を見る

場合であり、もう一つには最初から「生きよう」と私は思った」という結末に焦点を当てて、逆算し、行為の意味を考えると、いうものである。(中略) 溝口の「折り返し」の生は、ここで三島の逆算の生により決定づけられた。現実との一体化、美との一体化を望みながらも、なお疎外者のまま生きていく、作家三島由紀夫の覚悟が、その死ぬとも生きるとも取れる曖昧な煙草の「一服」と共にこめられているので。

中野の言を借りれば、最後の文言である「生きよう」には、意味の二重性がみとれる。一つは、作中の溝口の心情に即した意味での「生きよう」であり、さらにもう一つは、作者・三島によって意図された意味での「生きよう」である。そこに多重性を与えることにより、三島は本作にどのような意図、あるいは彼独自の文学観といったものを込めようとしたのか。

そこで次節からは、中野の優れた見解を踏まえた上で、放火後、いったんは死への誘いから、究竟頂の扉を叩く場面を援用しながら、「生きよう」という文言のもつ二つの意味を掘り下げて論考をすすめていく。その上で、本作の背景にある三島の文学観に焦点をあてると共に、三島文学の中での「金閣寺」の位置づけについても考察を加えることを目標とした。

一、「究竟頂」の扉が意味するもの

私は力の限り叩いた。手では足りなくなつて、ぢかに体を

ぶつけた。扉は開かない。(中略) ある瞬間、拒まれてゐるといふ確実な意識が私に生まれたとき、私はためらひはなかつた。身を翻へして階を駆け下りた。(第十章)

溝口は放火後、いったんは「究竟頂で死なう」という考えに囚われる。しかし、「拒まれてゐるといふ確実な意識」の獲得により、「身を翻して階を駆け下りた」のである。

その後に最後の「生きよう」という文言に繋がっていくことを考えると、「生きよう」に込められた意味を考察する前提として、「究竟頂の扉」が象徴するもの、および、その扉を叩いて拒まれたという意識に苛まれた時の溝口の心情を捉え直す必要があるのではないか。

三好行雄はこの問題について、次のように述べている。

「私の生はその彼方に確乎と定められ、それまでの私の行為は陰惨な手続きにすぎないからだ。」

有為子は不在である。彼女は(その彼方に)、比喻としていえば、金閣の第三層、究竟頂にいる。(中略) 最後のあの(拒まれてゐる)という意識には行為の明白な挫折があつたはずで、かれはいぜんとして、内界と外界を閉ざす錆びついた扉の鍵を手に入れてはいない。

この三好の言説によれば、溝口の初恋の女性で、すでにこの世にいない有為子を(究竟頂)の象徴であるとしながら、その(究竟頂)を「生」の場所として捉えていることになる。その上で溝口の「拒まれてゐる」という意識を、行為の「挫折」と読み取っ

ている。

右の見解に対して、佐藤秀明は以下のように反論している。

三好行雄は、究竟頂の場面に「行為の明白な挫折」を読むのだが、それはどうであろうか。「誰かが究竟頂の内部からあけてくれるやうな気がした」と「私」は言うが、三好は、それを有為子であると言う。この想像が的確な像を結んでしまふのは、五番町の遊郭では有為子は「留守」で、「二重の世界を自由に出入りしてゐたやうに思はれる」彼女ならば、究竟頂はその居場所としてこの上なく相応しいと思えるからである。しかし、「世界の掌」を伸ばして「私」を守ろうとした父親をここに想像することも可能で、いずれにせよ究竟頂は「私」の「死場所」、死の世界以外にない。ところが三好行雄は、「私の生はその彼方に確固と定められ」云々という本文を引用した上で、有為子は「（その彼方に）、比喩としていえば（略）究竟頂にいる」と言うのである。ここからは、究竟頂を「生」の場所として捉えていることが分かる。したがって「拒まれてある」という意識が生じたことによつて、行為の「挫折」が読み取られたわけであるが、これは明らかに誤読ではないのか。死の世界である究竟頂から「拒まれ」たことで外へ飛び出し、「生きよう」と思う。作品の記述はこう運ばれているはずである。

多分に引用が長くなつたが、佐藤は〈究竟頂〉が象徴するものを、溝口が母の不倫を目撃するところを、掌で覆い隠してくれた

父親と読み取ることも可能であると指摘し、〈究竟頂〉をあくまでも死の世界と捉えている。その上で、「拒まれてある」という意識を行為の「挫折」と読み取るのではなく、「生きよう」という意志に繋がるものとしている。

両者の見解は非常に対照的であるが、ここはどう解釈をするべきであろうか。

そこでもう一度、第一章で記されている溝口の人物形象にいったん立ち帰つておきたい。溝口は、自分の口から言葉が自在に出不いことに対する精神的苦痛を物語内の読者に次のように訴えかけている。

一般の人は、自由に言葉をあやつることによつて、外界と外界との間の戸を開けつばなしにして、風とほしをよくしておくことができるのに、私にはどうしてもできない。鍵が錆びついてしまつてゐるのである。（第一章）

右のように溝口は吃音であるが故に、外界との接触が容易ではなかつた。ここでの表現から、溝口の焦燥感をも含めて、外界との間を閉ざされた孤立した状態が読み取れる。

言語障害の溝口にはさらに、「金閣ほど美しいものは地上にはない」といふ父の言葉が既成概念として与えられてしまふ。そもそも本作は「幼時から父は、私によく、金閣のことを語つた。」という一行だでの文章が始まる。実物の金閣を見る以前、溝口は「叔父の家の二階の勉強部屋から」、「若葉の山北が西日を受けて、野の只中に、金屏風を建てたやうに見える」様子に、「金閣を想

像した。」そして、「写真や教科書で、現実の金閣をたがたび見ながら、彼の心の中では、「父の語つた金閣の幻のほうが勝を制した」のであった。その結果、「金閣といふその字面、その音韻から」触発された彼の想像は「途方もないもの」に成長してしまい、現実の金閣を見ても「何の感動も起こらなかつた」ことになる。

このように父から金閣に対する「言葉」の規定を受けた溝口は、さらにそれを吃音による疎外感と重ね合わせる形で、自分の内面を次第に肥大化させていった。

以上のような溝口の人物形象を合わせて、先程の〈究竟頂〉の問題を再考すると、扉が象徴するものとしては、それが父であれ有為子であれ（共に他界しているのでなおさらであるが）、溝口にとってのそれは、現実世界での「生」や「死」をさし示すといった実体的な空間ではなく、あくまでも自らの内的世界の中で肥大化された、いわば虚構の世界における空間となつていたのでないか。「拒まれてゐる」という意識自体においても、そういった肥大化された自己の内的世界に対する訣別であると考えられる。

先述した中野裕子は、この究竟頂の場面を次のように論ずる。

開かないと分かっている究竟頂の扉を何故叩いたか。「牢屋」の生を耐える溝口には、牢屋に入るためのレットルが貼られたのである。行為によつて変貌しなかつた生は、牢屋に入ることと引き替えに疎外者という名を与えた。言い換えれば病名宣告が、患者に与える精神的処方箋であるように、三島にとつて行為で得た疎外者のレットルは、彼が疎外者のま

ま生きていこうとする強い決意を支える最高の処方箋ではなかつたか。その決意は同時に彼の生きなければならぬ現実を規定し、彼の芸術的側面である小説世界もある意味で切り離したといえる。現実を修正する芸術、芸術を修正する現実という夢想との訣別が行なわれたのである。

ここで中野が指摘している（牢屋）、あるいは、三島にとつての〈強い決意〉とは何をさしているのかといった問題は、次節の「生きよう」という文言の二重性についての考察と合わせて考えてみたい。

二、「生きよう」という言葉の二重性

前述したように「金閣寺」の語りが終つた後、溝口がどのように「生きた」のか、「生きよう」としたのかは語られない。しかし、金閣に放火し、溝口即ち、現在の「私」にとつて全ての出来事が終了した後にはこの手記を書き始めたのであるから、少なくとも、この手記の最後の文章を書き終えるまで、「私」は生きていたことになる。「生きよう」と私は思つた」で擱筆した人間がすぐさま死を選んだとは考えにくい。

では果たして、この「生きよう」とは何時の時点での「生きよう」なのか。そして、「生きよう」とは、どんな心境で語る、いかなる意味の「生きよう」であるのか。

作中の溝口の心情を考えれば、少なくとも放火直後の意識とし

ては、ある種の満足感を持った上で、外界通路を押し広げ、今後の〈生〉を「生きよう」と思ったのではないだろうか。確かに溝口は金閣放火という大罪を犯したのだから、明らかに彼は犯罪者であり、社会的疎外者のレッテルを貼られたまま生きていかねばならないことになる。しかし「徒爾」であるから、私はやるべきであつた」と、それまで踏み出すことのできなかつた〈人生〉に〈行為〉によつて参加した意味は、溝口にとつて大きなものであつたと考えられる。

吃音のため外界から疎外されているという認識に包み込まれ、尚かつ、リアルな〈生〉を行き続けることによつて得たものではない、経験する前に与えられてしまつた「金閣ほど美しいものはこの世にない」という、父の言葉から「すでに壮麗な夕焼けを見てしまつた」という美の認識に冒されていた「私」は、すでに物語の時間において、リアルな現実を実感できない存在であつた。その為、「徒爾」である〈行為〉をあえてすることによつて、自己を縛り付ける「心象の金閣」を破壊し、外界へ、リアルな現実へと敢然と立ち向かおうとしたのである。

「心象の金閣」を破壊するために、つまり、外界との扉を開くために放火したのであるから、物語内の「生きよう」、つまり溝口の心情に即した意味での「生きよう」とは、〈行為〉によつて外界の扉を開け、外界との交通をスムーズに行おう、あるいは、行えるように努力しよう、という意志表示であると推し量ることができよう。

その一方で、一人称小説の体裁をなすこの作品は、自分の体験した出来事を語り直すさい、〈体験した私〉のそのときの思いを〈物語る私〉の現在の思いで改変することが可能である。そう考えると「生きよう」という思いは、〈物語る私〉のいわば、後知恵であるとも考えられる。このように考えてみると、〈体験した私〉の思いとしての「生きよう」（物語内における溝口の心情）と〈物語る私〉の思いとしての「生きよう」（作者・三島の意図および文学観）という二つの「生きよう」には、明らかに異なる位相をみてとれる。

この〈物語る私〉の〈生きよう〉というニュアンスを、後知恵という側面で捉え直すならば、最初に「生きようと私は思つた」という文言ありき、ということになる。つまりは、「生きよう」という最後の文言に焦点を当てて、逆算し行為の意味を考えると、このものである。溝口の放火後の回想による独白体は、〈物語る私〉の「後知恵」、即ち三島自身が作中に自らの哲学や思想を織り込んでいたものだと考えられる。ドナルド・キーンも指摘しているように、難解な哲学や思想を語る作中の溝口には人物形象としてのリアリティが欠如しているといえよう。

そうした溝口から発せられた最後の文言となる「生きよう」に、作者・三島はどのような意図をもたせようとしたのか。そこで、先述した中野の論文から抽出した〈牢屋〉というキーワードのもつ意味を考察することを通じて、三島が「生きよう」に込めた意図について考察をすすめてみたい。

この問題について、田中実は次のように言及している。

三島の言葉を借りれば、「人間がこれから生きようとするとき牢屋しかない」という命題をこの〈語り手〉は抱え込んでいる。「牢屋」から脱したはずのものが新たな「牢屋」に陥るという矛盾である^①。

溝口は外界との通路を開くために金閣を焼き、外界との通路を模索するためにこの〈手記〉を書いたと考えられる。しかし、溝口が物語内での「生きよう」という言葉に出会った時、既に溝口自身が自由を失う立場に置かれてしまっているのである。外界との通路を開くための放火という〈行為〉が、逆に物理的には外界との扉を閉ざすという皮肉な結果をもたらしている。なぜなら、溝口は金閣に火を放ち、そして「生きよう」と思った後、この〈手記〉を綴りはじめるわけだが、客観的事実として、彼は「金閣」という国宝を灰にしてしまった、つまりは犯罪者になつてしまったからである。溝口は「外界」との扉を開くために、つまりは〈他者〉との相互関係を築くために放火し、「現実の金閣」を焼くことで、「心象の金閣」を焼き尽くしたのであった。だが、そのために犯罪者になるという結果を招来したのである。扉を開くために行った行為が、皮肉にも新たな扉を生み出す要因になつてしまったのだ。

では、犯罪者とはいかなる存在であるのか。放火犯として拘束され牢屋に入ったとしても、国家権力から逃げ続けたとしても、行為後の溝口がいる場所は、〈他者〉との関係性の自由を奪われた

閉塞空間であるに違いないであろう。「人に理解されないといふことが唯一の矜り」と考え、「ものごとを理解させようとする、表現の衝動に見舞はれなかつた」溝口が、生きる為に語り始めた場が、皮肉なことに、自由を奪われた空間、〈嘘〉としての、あるいは觀念としての〈牢屋〉であつたと考えて差し支えないであろう。まさにそれは、溝口自身が招いたイロニーであるとともに、三島によつて意図され、溝口に対して投げ与えたイロニーでもあるのだ。では、そういった閉塞的な空間＝〈牢屋〉を意図した、その背景にある三島の文学観とはいかなるものであつたらうか。

三、三島の文学観と「金閣寺」の位置

「金閣寺」前後の三島文学の推移について、高橋和幸は次のように論じている。

三島文学の初期から中期への移行は、このような詩そのものの幸福から、詩と詩人が分離し外界と内界の醜悪さや不完全性、不足を批判攻撃することが文学創造の原動力となつていた^②。

まさに三島文学初期の文学観は、「詩を書く少年」で描かれた、内面的世界に留まり続けた、「対立も緊張も見られなかつた」幸福な時代によつて生み出されてきた。しかし中期の「金閣寺」においては、醜悪な現実世界と対峙し精神的な痛みや苦しみを伴いつつも、その在るがままの現実を受け容れようとする方向性が示

されるようになったといえよう。

このような見解に従えば、先述した二つ目の問い「三島にとっての〈強い意志〉とは、『仮面の告白』（昭二十四・七・五）において描かれたような、「私」が抱えてきた〈世界に対する違和感〉を、どのように乗り越え、そしてどのように受け容れたかをフィクションとしての「金閣寺」を描き上げることで示そうとしたものであるといえよう。それは、描くことによって内在する問題を越えていこうとする作者・三島自身の、〈生〉に対する姿勢でもあるだろう。

その〈生〉に対する姿勢こそ、内的世界からの決別、そして現実の醜悪で不完全な世界との対峙を決意するものであり、最後の「生きよう」は三島自身にとつての、痛切な寂しさを伴った書き手のマニフェストであり、それが『鏡子の家』（昭三十四・九・二十）での戦後社会を見つめるニヒルな眼差しに繋っていくのである。

このように、「金閣寺」は、数多い三島文学の中でも、内容の面できわめて優れているというだけではなく、三島文学の方向性といった側面においても、必然的に中核をなす作品として位置づけ得るものと考えられる。

おわりに

以上のように、拙論においては、「金閣寺」の主人公である溝口の最後の文言となる「生きよう」に焦点をあて、それに込められた溝口の心情、ならびにその背景をなす三島の文学観について考察した。そのための補助線として、究竟頂の扉を溝口が叩く場面を援用しながら論及をすすめていった。

ここでは、「生きよう」という結語に、〈行為〉によって〈現実世界〉へと踏み出したことによる、ある種の満足感をもった溝口の心情と、社会への扉をこじ開けたつもりが、犯罪者（社会的疎外者）として新たな扉の前に立ち塞がれるといったイロニーにみちた逆説的空間に溝口を立ち至らせた作者・三島の意図という異なる位相を読みとった。

その背景をなす三島の文学観については、「詩を書く少年」に代表される、内的・芸術的世界に留まっていた作中の主人公が、そのような〈自己の世界〉から、醜悪で不条理でもある〈現実世界〉へ足を踏み入れようとする推移を表しているものであると考察した。そういった三島の文学観の推移における中核をなすものとして「金閣寺」が位置づけられると結論づけた。

このように、「生きよう」という最後の文言における二重性の問題を通じて、三島の文学観ならびに「金閣寺」の位置について考察してきたわけであるが、本作についての筆者の今後の研究課題としては、放火に至るまでの溝口の心理描写についての再考を

挙げてみたい。特に、雪の中で溝口が妊婦の腹を踏みつける場面、あるいは、柏木や老師の存在によって溝口の心理に「悪の意識」が膨らんでいく、といった描写場面を、人間にとつての〈性悪説〉というフィルターを通して論考していくことに今後の研究の余地も残されているのではないかと考えている。

注

- (1) 「美の変質―「金閣寺」論序説」『新潮』七七卷三号 昭和五五・一二・一 一六七頁
- (2) 「『金閣寺』の一人称告白体」『近代文学試論』二七号 平成元・一二・二五 二九頁
- (3) 「三島由紀夫 金閣寺の世界」風景書房 平成十二・二・十五 二四二頁
- (4) 西本は次のように言及している。

「国宝を焼くということは、そこに非人間的な反社会性がみられるだけであり、犯人に対しての同情の余地がない。そのような人物を主人公として扱う事自体、ストオリーの上での制約が強く、大きな冒険であるだろう。又、昭和二十五年に起った事件の再現であるならば、それ以後六年も経過した時点ではニュース、ストオリーの即効性も薄く、新鮮な興味の対象とは言えないだろう。こうして考えてみれば、作者にとつてこの素材は、あまりにもマイナスの要因が大きいといわねばならない。」「『金閣寺』の世界(一)―文芸構造とその主題―」『日本文藝研究』三十六巻一号 昭和五九・三・五 六九頁

寺』の世界(一)―文芸構造とその主題―」『日本文藝研究』三十六巻一号 昭和五九・三・五 六九頁

(5) 「『金閣寺』試論―疎外の鏡―」『国文目録』三十号 平成二・十二・二十 一〇二頁

(6) 「美と人生」『国文学 解釈と鑑賞』 昭和四二・六・一 一四一、一四三頁

(7) 「『金閣寺』観念構造の崩壊」『椋山国文学』一九号 平成七・三・一二 四三頁

(8) 三島が小林秀雄との対談の中で「人間がこれから生きようとするとき牢屋しかない、というのが、ちよつと狙いだつたんです。」と発言している。「対談・美のかたち―『金閣寺』をめぐる―」『文芸』一四巻一号 昭和三十二・一・一 一四三頁

(9) 前掲「『金閣寺』試論―疎外の鏡―」一〇二頁

(10) ドナルド・キーンは次のように言及している。

「金閣の放火犯がその行動をとるに至った裏に、三島はきわめて複雑で、しかも彼を駆り立ててやまない動機を与えた。舞鶴湾を望む田舎から来た吃音の、単に義務教育を受けただけの主人公が、それほど複雑な哲学的思想を抱懐しようということの非現実性は、ほとんど顧慮していないように見える。」「日本文学の歴史15 近代・現代篇6」中央公論社 平成八・九・十二 二六八頁

(11) 「『金閣寺』の〈語り手を超えるもの〉―〈作家へ〉」

『芸術至上主義文芸』二四号 平成十・十一・二二頁

(12) 「金閣寺」連載開始より一年はやく発表された作品に「詩を書く少年」(昭和二十九・七)がある。主人公は、「詩はまつたく楽に、次から次へとすらすら出来」る天才を自認する少年である。このような言葉の妄信に憑かれた少年は、現実からこぼれおちる、言葉によって掬い取りきれないなものかの存在など信じない、まだ「世間の現実と彼の内的世界との間には、対立も緊急も見られない」、ある意味で幸福な状態にいたことになる。

(13) 「三島由紀夫の初期世界の考察」『私学研修』一五一・一五二号 平成十一・二二二頁

(14) 許晷が次のように指摘している。「『金閣寺』は『鏡子の家』と直接繋がる作品であり、「生きようと私は思った」という『金閣寺』の最後の一句は、「みんな欠伸をしていた。これからどこへ行こう、と峻吉が言った」という『鏡子の家』の書き出しの文と絶妙にマッチしている。」「『金閣寺』論―手記とモノローグの間―」『稿本近代文学』平成九・十二・十 一二四頁

追記 本文の引用は、

新潮社版『三島由紀夫全集6』によった。

(たなか・ひろゆき 本学卒業生)